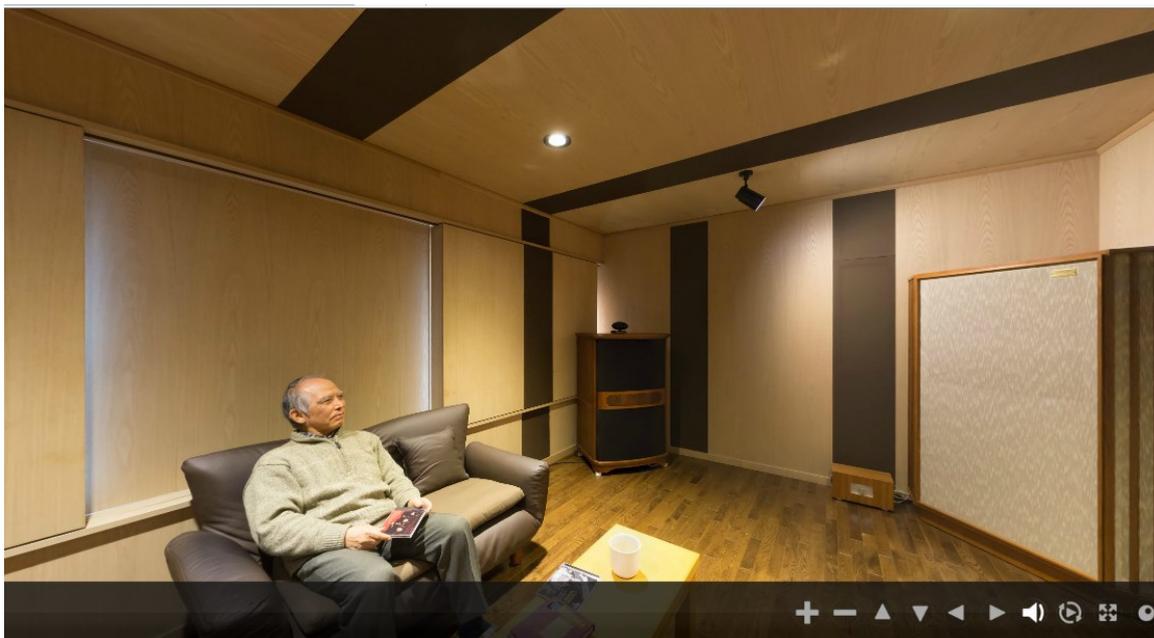


連載 第21回 『試聴室探訪記』

～谷口とものり、魅惑のパノラマ写真の世界～

マンションの一室をコンサートホールに・・・南邸を訪ねて

フォトグラファー 谷口 とものり・編集委員 森 芳久



今回の試聴室探訪は、自宅のマンションの一室をコンサートホールの響きを求めてリスニングルームに改装した南邸を訪問しました。

横浜市のマンションにお住まいの南英洋氏は、もちろんオーディオファンですが、それ以上に、“コンサートゴアア”と呼ばれる熱烈な音楽ファンです。事実、南氏は昨年コンサートに120回も足を運ばれているのです。

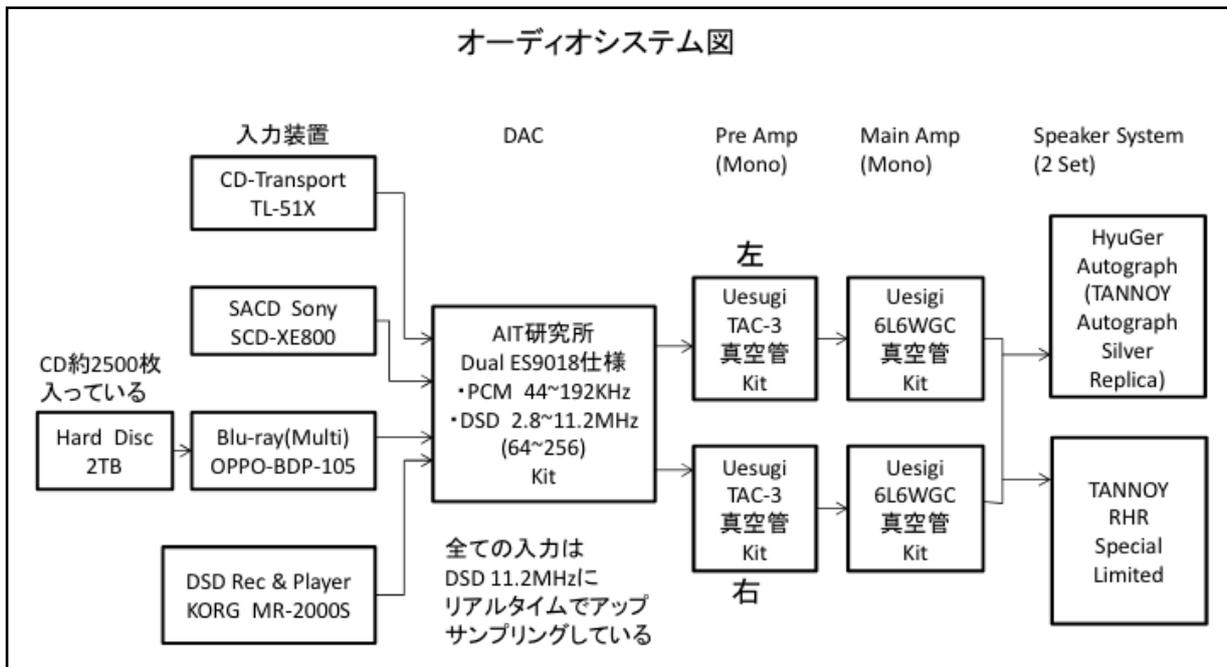
若いときから頻繁にコンサートに通い続けた南氏が、生演奏はもちろん、そのホールの響きに魅了され「いつかはこのコンサートホールの響きを自宅で」との夢を膨らませてこられたのは当然のことでしょう。そして長年務められた大手自動車会社を定年退職され、オーディオを楽しむ時間的余裕が増えたこともあり、マンションをリフォームするのに合わせ、思い切ってその一室を本格的なリスニングルームに作り変える決心をされたのでした。

一般的に、集合住宅という限られた条件の中で理想的な試聴室を作るのにはスペースや遮音など多くの難問があります。特に天井高が限られているマンションなどでは、その設計や設置するスピーカーなどに大きな制約をもたらします。南氏もそれを承知で、コンサートホールの響きを再現することを第一目的として、その設計を依頼したのが、この試聴室探訪記の中でも度々登場している石井伸一郎氏だったのです。

果たして、今回もその石井マジックがどのように効果を発揮したのでしょうか。お断りいたしておきますが、私は石井氏の設計を手品 (Magic) とは思っておりません。彼の緻密な計算と豊富な経験から割り出された高品位な魅力 (Magic) の音の再現手法に尊敬を込めてマジックと呼んでいるのです。今回も石井氏が非常に限られた条件の中、どのような音を創り上げられたか興味津々でお部屋に案内していただきました。12畳の長方形の部屋には、一般的なスピーカーレイアウトとは異なる、長手方向の壁にスピーカーを配置されています。これもまさに、定在波を防ぎ、響きを豊かにする石井マジックの一つなのです (詳しくは、石井氏の囲み解説をご覧ください)。

肝心の音ですが、最初に聴かせていただいたのは鮫島由美子のドイツ歌曲、そしてフィッシャー・ディースカウが歌うシューベルトの歌曲「魔王」などのボーカルでした。確かにボーカルが中央にしっかりと定位し豊かな残響音が部屋に満ち満ちていました。この部屋で極上の音を楽しむためには、スイートスポットに座ることが要求されますが、主人が日夜一人で音楽を楽しむのにはこれで十分といえるでしょう。圧巻はベーム指揮のベートーベン交響曲第9番二短調です。ウーンフィルの艶やかな音がこの部屋一杯に心地よい残響音を伴って聴き手を包み込みます。眼を閉じれば、12畳のこの部屋の壁は魔法のように消え去ってしまいました。確かに、そこには音楽と美しいホールの響きがありました。

装置の構成は、下記の南氏自身が描かれたシステム図をご参照ください。



それでは、今回も谷口氏のパノラママジックをお楽しみください。

“分譲マンションの12畳間でタンノイのオートグラフが鳴った”

「南邸のリビングルームについて」

石井オーディオ研究所 石井 伸一郎

今回の部屋のオーナーの南氏は筆者の「リビングルームの音響学」を読んでリビングルームの建設を考えられたが、当初予定していた建築業者が難しいので降りることになり、筆者が以前から関係していた世田谷の藤村建設に声を掛けてきたのがきっかけである。この藤村建設は会社の事務所の2階に10畳間の石井式ルームが造られており、この部屋が「リビングルームの音響学」に紹介されていたために南氏は藤村建設に来られたのである。

藤村建設の藤崎専務と筆者が現地を訪れたときは15畳間のリビングルームをリビングルームにするとのことだったが、15畳間では天井高さの点から縦長配置でも横長配置でも特性に問題があり、幅を少し小さくして12畳間にする横長配置の場合は伝送特性が良くなることが分かったので、12畳間にすることにした。

最初はリビングルームの寸法を小さくして12畳間にすることを検討したが、リビングルームは南に面して大きな硝子戸があり、これを塞ぐことになると居住性の点で問題があるので、北側の二つの6畳間を連結して12畳間にすることにした。この場合それぞれの6畳間には窓があり、当初この窓を塞いでしまう案もあったが非常の場合を考慮して窓を塞ぐのはやめることにした。

ただし窓の部分に吸音部と反射部がくるので、吸音と反射構造の移動式の壁面を取り付けることにした。完成してみるとやはり窓を付けたのは正解だったことが分かった。この窓の構造は藤村建設の藤崎専務が考えてくれたが、非常に良く出来ていて軽く開閉できる。

吸音部の配置は図1のようになっているが、吸音部比率は13.3%と小さめに設定した。これは南氏が主にクラシックを聴くためである。

筆者の設計した部屋では完成すると部屋のコーナーに基準スピーカーを設置し、マイクを縦方向と横方向の中心線上7点に置いた場合の伝送特性を測定して、あらかじめシミュレーションした特性と比較しているが、南邸の縦方向の特性を図2に、横方向の特性を図3に示す。図2の縦方向特性では、筆者が発見した日本海溝(30Hz付近のピーク後の100Hz付近までの大きなディップ)が出来ているが、横長方向特性では谷が無く良い特性になっていることがわかる。したがってこの部屋は横長配置で使用する場合のみ良い特性が得られることになるのだ。

タンノイオートグラフを横長配置した場合の特性は図4のように非常に良い形になっている。天井の高さが低くても横長配置にすればこのように良い特性になるのである。天井の高い部屋でないと縦長配置で良い特性は不可能なのだ。

南氏はコンサートホールに頻繁に行かれているが我が家の響きはコンサートホールの響きとそっくりだと非常に満足されているので、興味のある方は訪問されることをお勧めする。南氏は同好の士は大歓迎することなのでオーディオ協会の事務局を通じてコンタクトして頂きたい。

図1 南邸の吸音部配置

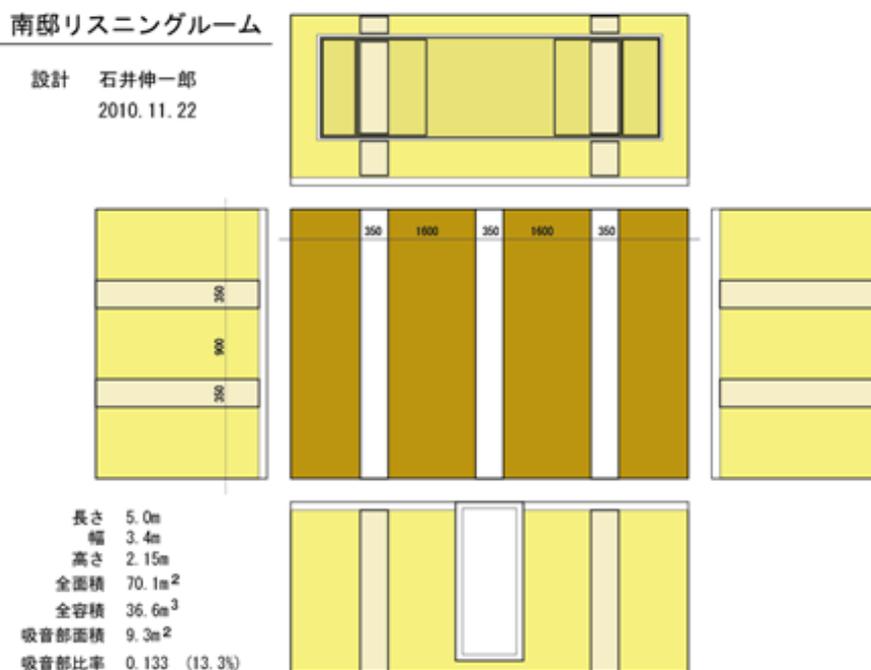


図2 南邸の縦方向の基準特性

上の特性グループが実測特性で下の特性グループがシミュレーション特性
これは前方左下隅にスピーカーを設置し中心線上7点までの伝送特性である。
スピーカーに近い方から赤、橙、黄、緑、青、藍、紫でシミュレーションと
実測特性ともに同じ色なので比較しやすい。

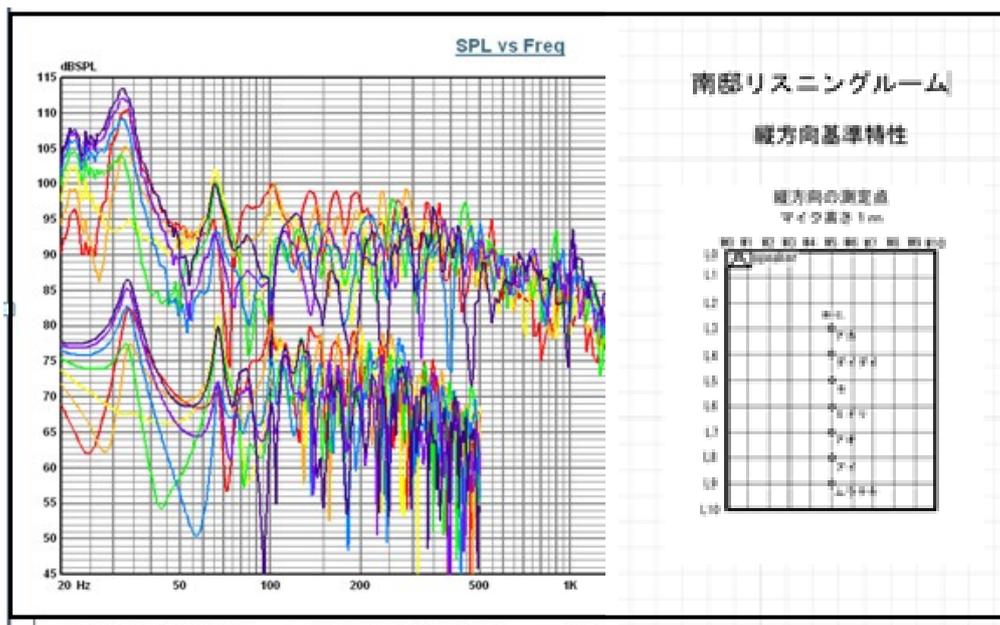


図3 南邸の横方向の基準特性

上の特性グループが実測特性で下の特性グループがシミュレーション特性
 これは前方左下隅にスピーカーを設置し横方向中心線上7点までの伝送特性である。
 スピーカーに近い方から赤、橙、黄、緑、青、藍、紫でシミュレーションと
 実測特性ともに同じ色なので比較しやすい。

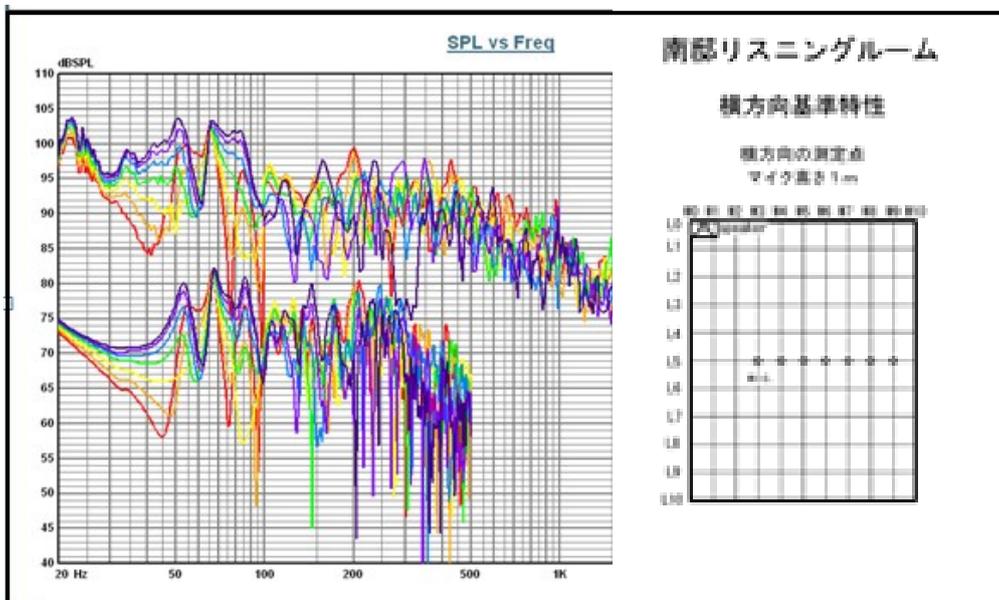
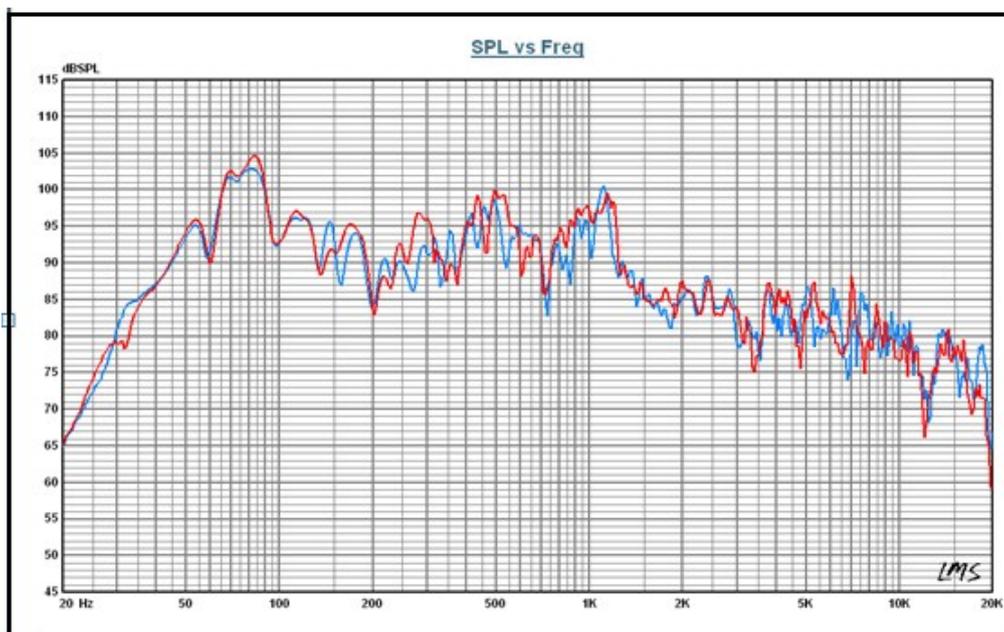


図4 南邸のタンノイオートグラフの特性
 青が左チャンネル、赤が右チャンネルの特性
 左右の特性が非常に良く合っているので定位が良い



パノラマ画像の操作説明

- パノラマ写真は、[ここ](#)か、はじめのページの**画像**をクリックしてご覧ください。
(ローディングに若干時間がかかる場合があります。)
- マウス操作で、画面を上下・左右 360 度、自在に回転してご覧いただけます。
- 画面下にある操作ボタンで次の操作ができます。
 - + 画面のズームイン
 - 画面のズームアウト
 - ← 画面の左移動
 - 画面の右移動
 - ↑ 画面の上方向への移動
 - ↓ 画面の下方向への移動
- 尚、カーソルを画面のオーディオ機器に当てると機種名が表示されます。